■研究十二月往来〈221〉

# 実盛の「怨み」

佐伯真一

実盛はなぜ亡霊となったのか。能の「実盛」では、

その執心の修羅の道　めぐりめぐりてまたここに　木曾と組まんとたくみしを　手塚めに隔てられし　無念は今にあり

というように説明される。だが、高木信氏『平家物語　想像する語り』（森話社二〇〇一年）が指摘するように、『平家物語』諸本の本文では、そのような「無念」は特に語られていない。『平家物語』では、実盛が執したのは、若い者に侮られないように白髪を染めて老齢を隠すこと、また故郷に名誉ある帰還を遂げるために錦の直垂を着ることの二つである。壇ノ浦で義経だけは討ち取ろうと追いすがる教経などとは違って、実盛には義仲を狙わねばならないような事情はない。そして、篠原合戦の直前に東国の武士達と巡酒をした記事からも明らかなように、討死はかねて覚悟の上であった。つまり、『平家物語』の実盛は、希望どおりの形で覚悟の討死を遂げたのであって、その尋常ならざる執念への畏怖はあり得るとしても、怨霊となるような「怨み」は、特に具体的に描かれてはいないのである。

さて、能「実盛」における実盛亡霊の登場が、『満済准后日記』応永二十一年（一四一四）五月十一日条に、

斎藤別当真盛（さねもり）霊、於二加州篠原一出現、逢二遊行上人一、受二十念一云々。去三月十一日事歟。卒都婆銘令二一見一了。実事ナラバ希代事也。

と記されるような、当時のホット・ニュース、時事的な素材を生かしたものであることは、よく知られている。特に、かつてこの『鉄仙』の紙上でもその点を論じた中村格氏の論に詳しい（「実盛奇蹟の正体」『鉄仙』二三二号＝一九七五年、『室町能楽論考』わんや書店一九九四年参照）。

中村氏の指摘のように、この「実盛亡霊」出現事件は、篠原周辺に存在した実盛の伝承を利用して布教拡大の手段とした、時衆の宣伝である可能性が強い。つまり、民衆の信をつなぎとめ、かつ支配層の信を獲得するための有効な手段として、時宗教団によって仕組まれた「奇蹟」であったと考えられるのである。

もっとも、中村氏は、そうした「奇蹟」が演出される背景には、現地に「暗い、土俗的な」「怨霊譚」の伝承が存在したと考える。篠原古戦場の周辺に、「実盛塚」「首洗い池」など、『平家物語』には描かれない多くの伝説地が存在するのも、そうした伝承の存在を語るものとされるわけである。確かに、現地には「実盛伝承」があったのだろう。だが、それが、果たして実盛の「怨み」を語る「実盛怨霊伝承」と呼ぶべきものであったのかどうかについては、筆者はもう少し判断を保留したいと思っている。もちろん、「室町時代の現地に実盛怨霊伝承は存在しなかった」などと断言することは不可能である。だが、「怨み」があったから亡霊が出現したのではなく、むしろ、「亡霊出現」が語られたために「怨み」が必要となる―という構図で考えることも可能ではないだろうか。

そのように言ってみたくなる大きな理由は、「実盛怨霊伝承」が語られる場合、しばしば、いわゆる「実盛虫送り」の民俗行事が意識されているように思われるからである。稲に付く虫となって追いやられたと語られる実盛のことだから、古くから怨霊として語られてい

たのではないのかーそんな意識が、実盛を語る時に一つの前提をなしているということはないだろうか。特に、

昔、斎藤実盛は、稲株につまづいて倒れたために敵に殺された。そのため、実盛の霊が稲の害虫になったのだという。それでサネモリサマの霊を慰め、これを送ることが、害虫を送り出すことになるのである。（愛媛県東宇和郡城川町）

というようなタイプの伝承は、実盛が怨霊と化したという見方に対して、影響力を持っているように感じられる。だが、既によく知られているように、旧暦六月の篠原合戦で討たれた実盛が、「稲株」につまづいたわけもない。こうした虫送りの伝承が篠原合戦との確かな脈絡を有しているのかどうかは、疑ってかかる必要があるだろう。

実盛と虫送りの関連は、むしろ、柳田国男が「サナブリ」（田植えを終える祝いの行事）の転化と考えたように、「サネモリ」の名による付会とするのが、現在の通説というべきだろう。最近では、伊藤清司氏『サネモリ起源考』（青土社二〇〇一年）が、中国江南の駆蝗神である「劉猛将軍」即ち「蚱蜢」（Zha Meng）の転化ではないかとする新説を唱えている。つまり、実盛が虫送りに習合されたのは、彼が「怨み」を抱いて死んでいったと語られていたためではなくて、単に『平家物語』や能で有名になり、かつ虫送り行事と紛れやすい名前を持っていたからに過ぎないかもしれないわけである。

しかも、虫送りの民俗は全国各地にあるが、それをサネモリと呼ぶのは西国のことである。本島知辰『月堂見聞集』享保十七年条が、「西国方言、此虫を実盛と申候」と記していることは著明であろう。現在は近畿・中国・四国あたりに分布するようである。してみれば、少なくとも北陸に発したものではないし、虫送りを「サネモリ」と呼ぶ習俗が北陸に到達したことがあったかどうかさえ疑わしい。加賀などには実盛と同族の斎藤一族が居住したはずだが、実盛の子孫が虫送り伝承に関与したとは考えにくい。「つね日頃追慕してやまないご先祖さまが、こともあろうにウンカごとき虫けらになって大切な稲を食い荒らすなどということを、子孫が他人に吹聴するはずがない」という、伊藤清司氏の発言は傾聴すべきだろう。

要するに、虫送りの民俗の問題は、北陸に「実盛怨霊伝承」が存在したことの傍証にはならないと考えられる。篠原周辺の伝承は、『平家物語』の古典化に伴って形成された古戦場の伝承の類と見ることはできないだろうか。たとえば、能「頼政」に、頼政が自害した「扇の芝」が登場し、現在も平等院に存在するように、『平家物語』ゆかりの古戦場などの「名所」が、世阿弥の時代には既に生まれていたと思われる。実盛の怨霊を恐れるというよりは、むしろ、『平家物語』で知られた実盛の事績を誇るような心意による伝承の存在を想定することも可能ではないだろうか。

そのように考えてくると、ことは、芭蕉の「むざんやな甲（かぶと）の下のきりぎりす」の解釈の問題にも及ぶ。初出形は、初句が「あなむざんやな」であったと見られ、能「実盛」をふまえていることは周知の通りだが、この句は、『奥の細道』では、「此所太田（ただ）の神社に詣づ。真（さね）盛（もり）が甲・錦の切あり」云々として、多太八幡の所蔵する、実盛が義朝から頂戴したものという兜が、実に立派なものであったと述べた文章の後に記されている。この句にも、「きりぎりす」に虫送り伝承を重ね、実盛亡魂の化身を読み込む解釈もあるようだが、果たしてそうか。芭蕉の時代には、実盛虫送りの民俗は既に存在したかもしれないが、少なくとも、この兜や錦の切れを飾って旅の客に見せる神社の心意はそうしたものではなかっただろう。一句の鑑賞としては、「あなむざんやな」という能「実盛」の言葉と、「甲の下のきりぎりす」という情景の取り合わせに俳味を見るべきものと思う。芭蕉が受けとめていたのは、実盛の「怨み」ではなく、誇りと自意識だったのではないだろうか。